

## コラム 一 島根から伝える「地方の世界」

地方だからこそ残されている「人」としての豊かな生き方、それを可能にする自然や文化、伝統、さらに地域社会を我々は守っていかなければなりません。島根の知事をしながら、そうした地方の良さを感じたり、考えさせられた折りなどに、ときどき小文を書いてきました。

以下のコラムで私が見ている「地方の世界」をのぞいてみてください。

## 1. 古代出雲 —『古事記』や『風土記』の世界

3月の三連休初日。久々の快晴。我々夫婦の散歩コースの一つ、松江市郊外の「はにわロード」へ出かける。

12時半に松江市県庁前から八重垣<sup>やえがき</sup>神社行きのバスに乗る。30分ほどで「はにわロード」の起点、八重垣神社に着く。八雲立つ風土記の丘を結ぶ約2.0kmのルートだ。

八重垣神社は「八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに 八重垣作る その八重垣を」の古歌で名高い神社で、すぐに神話の世界に入る。素盞鳴尊（すさのおのみこと）と稲田姫（いなだひめ）を祀り、最近では縁結びスポットとしても有名。ここの「鏡の池」では、社務所でいただいた和紙にコインを載せ、それが沈む早さ遅さで縁談を占うのが若い女性に人気がある。

八重垣神社をスタートし、水田わきの心地よい散歩道をそぞろ歩く。トサミズキ、サンシュユ、ユキヤナギなどの春の花。ウグイスの声も聞こえる。道沿いには所々に埴輪（はにわ）を模した置物が置かれている。

それから林の中を少し歩くと、神魂<sup>かもす</sup>神社へ到着。もともとこの地にあって、神魂神社は国造家<sup>こくそう</sup>の私斎場として使われていた由。深閑とした境内にいただけでいい所に来たという気になる。

さらに、「こんな田舎に？」と不思議に思う人がいるかもしれないが、ここには現存する最古の大社造りの社として国宝に指定されている本殿がある。

神魂神社から八雲立つ風土記の丘へ向かう。この途中に「出雲かんべの里」がある。民芸体験や出雲の昔話を聞いたり、食事もできる。

そこから少し行くと「八雲立つ風土記の丘」だ。岡田山古墳を含むこの風土記の丘周辺は、古（いにしえ）の出雲の中心であり、出雲国庁があったところだ。

風土記の丘にある学習館では、古代出雲の様子を再現したジオラマで、出雲の歴史を学ぶことができる。「見返りの鹿」と言われる後ろを振り向く見事な鹿の埴輪<sup>みもの</sup>が見物だ。

入ると、休日だというのに、館長の本間さんが当番だということで出ておられて、少しお話を聞いた。「この地は狭いところではあるが、意宇川の上流に位置し、船での交易の跡が残っている。また、古代に島根半島へ向い、そこから隠岐に船の出る港への道も残っている」のだそうだ。当時は、土木工事が発達していない時代であり、水をコントロールするには手頃の広さだったのだろう。

「風土記の丘」から1.5kmくらいの範囲内に出雲国庁、出雲国分寺、国分尼寺、国庁の正倉などが点在している。国庁跡へは、田んぼの中をゆったり散歩して30分弱だ。

昨秋案内した東京の友人夫妻も「はにわロード」の風物は、正に日本の原風景だといたく感動していた。人に知られない古代世界があるということだろう。

帰りは「風土記の丘」の付近のバス停から30分で出発点に戻る。行き帰りのバスで1時間少々、散歩、見物（見学？）で2時間少々。4時間弱の手頃なハイキングだった。



風土記の丘



神魂神社

(島根県のホームページ<http://www.pref.shimane.lg.jp>から「ようこそ知事室」の「私の島根『見聞き書き』」にお進み下さい。)

## 2. 島根のこころとからだのリフレッシュスポット

新緑が目鮮やかなゴールデンウィークの最終日、松江市から南へ約80km、車で約1時間半ほど走り、国道54号沿いに広がる県境の町「飯南町」へ行く。そこで国道から東に少し入って到着したのは「県民の森」。

ここには、オートキャンプサイトのほか、炊事棟やバーベキューサイト、コインシャワー、水洗トイレなどが整備されており、緑豊かな自然に囲まれた静かな山あい、快適なアウトドアライフが楽しめる。

また、宿泊室・食堂・浴室などを備えた研修宿泊施設「研修館」もあり、校外学習や各種研修、山歩きの拠点、合宿やリフレッシュの場として利用できる。

今日のメインは「森林セラピー」。「県民の森」は山陰唯一の森林セラピー基地として、多くの人に親しまれている。その魅力を体験しようというのが、今回の目的。

お昼前に到着し、まずは腹ごしらえ。

来る途中、国道沿いの道の駅『赤来高原』の薬膳レストラン「ローワン」さんで買った『薬膳弁当』をあける。食材はすべて近辺のもの。県産和牛や町内産の新鮮な野菜やヤマメ、山菜、特産品として売り出し中のヤマトイモのほか、生薬のナツメ、クコ、松の実などもある。味も彩りも申し分なし。屋外の東屋で爽やかな風に吹かれながら食べるのがよい。

昼食を終え、いよいよ「森林セラピー」へ。ご案内いただく森林セラピーガイドの皆さんから、森林散策によるリラックス効果などについて説明を受けた後、準備体操をし、歩き始める。

スタート後、清流小田川沿いの平坦なコースを歩きながら、ハナイカダ（ミズキ科）やヤマブキ（バラ科）など、この時期ならではの花を楽しむ。ガイドの皆さんの親切な説明があるので、とてもわかりやすい。



ハナイカダ

川沿いの道を右に折れ、緩やかな上り道に差しかかる。

シイタケのホダ木が立ち並ぶきのご園を通り過ぎると、才谷コースのよく手入れされたヒノキ林に入る。優しく差し込む木洩れ日とウッドチップが敷き詰められたフカフカの柔らかい遊歩道がとても心地よい。

沢からの水が流れを作り、姿は見えないがカエルの声も聞こえる。道端にできた小さな水たまりに多くのオタマジャクシがいたのにはびっくり。この山の保水力で守られ、また命を繋いでいくのだろう。そういえば、この森は、どこにいても、いつも川のせせらぎがバックグラウンドミュージックのように聞こえてくる、特別な空間になっている。

さらに進むと癒しの森、山野草園に出る。ここでも季節のいろんな花が楽しめる。特に印象的だったのがヤマシャクヤク（メギ科）。見事な白い花がそこここに凜として咲いている。



ヤマシャクヤク

山野草の勉強もしながら歩みを進め、ガイドの方々おすすめの「座観ポイント」へ。

大きな木の下に座り込み、しばし瞑想。川のせせらぎ、鳥の声、森林の香り、木肌のぬくもり、清浄な空気。からだ全体が森の精気にやさしく包み込まれる感じだ。

県民の森を後にし、車で走ること約20分。国道54号から国道184号へと入り「<sup>か</sup>加田の湯」へ。

この温泉は、源泉掛け流しで、神経痛、筋肉痛、関節痛などによく効くとのこと。岩風呂、桧風呂のほかサウナもある。ウォーキング後の体をにごり湯の中で伸ばせば、気分そう快。

お風呂の後の楽しみは夕食。ここ加田の湯では、地元の皆さんが地域の食材をふんだんに使ったお料理でもてなして下さる。セラピーとこうした食事では体中の血液が浄化される気分になる。

お風呂だけの利用も可能で、近隣からも多くの方々が利用されているとのこと。  
食事を終え、飯南町の中心の国道沿いに建つ町営の「憩いの郷・衣掛（きぬがけ）」  
へ移動。明るく清潔な館内には洋室・和室がそれぞれあり、料金も低廉。

翌朝は、快眠でさわやかな目覚め。妻と朝の清気の中を散歩に出掛ける。近所にはぼたん園や、モミの巨木がそびえる赤穴八幡宮（あかなはちまんぐう）があり、  
いい所に来たなぁという気分になる。

その後、衣掛荘から歩いて3分の国道沿いの「道の駅赤来高原」にあるレストラン「ローワン」で朝食。前日のお弁当もお世話いただいたお店だが、仕事で広島へ行くときなどに、時々寄っていて、女性シェフのMさんはよく知った方。薬膳がゆ、焼きたてのパン、サラダなどの朝食は、Mさんならではのもの。

こちらでは、地元で収穫された野菜をふんだんに使用した「日替わり薬膳ランチ」（1,200円）も大人気。味はもちろん、盛りつけの美しさも素晴らしい。今回は食べなかったが、シャキッとした旬の新鮮野菜がカレーと良く合う「薬膳カレー」（880円）もある。予約をすれば、昼はフレンチ風薬膳料理、夜はディナーコースが楽しめる。

Mさんが工夫をこらした料理は一級品だ。広島県など県外からこられるお客も多い由。私は「東京などに店を出せば、若い女性などには大人気になりますよ」といっつも言うのだが…。

のんびり森林セラピー、ゆったり温泉、おいしい自然食、この3点セットが飯南町セラピーだ。是非、試してみてください。

（島根県のホームページ<http://www.pref.shimane.lg.jp>から  
「ようこそ知事室」の「私の島根『見聞き書き』」にお進み下さい。）

### 3. <sup>みほのせき</sup>美保関の古刹と灯台

10月の三連休最終日、朝から好天。妻と時々行く八重垣神社方面への"バスand散歩"に出かけることにした。

ところが、バス停でバスを待っていると「美保関」行きが先に来て、妻が「これ、どう？」と言う。私も「そうだな」と、予定を変えてこれに乗り込んだ。

中海のそばを走るバスから、大根島や、遠くに雄大な大山を見る。絶景かなと思う。

バスが終点到着。が、私が思っていた美保関のまちまでにはまだ相当あるはず。少し焦って周囲を見渡すと、バスターミナルには小型のバスが私たちを待っていた。ここからは美保関町民バスに乗り換えるのだ。

再びバスにゆられること30分。途中、境港方面から来たであろう女性の旅行客数人を乗せ、バスは「美保関」に到着。境からもバスで来れるのだ。

まず、隠岐に配流された後鳥羽上皇、後醍醐天皇の<sup>あんざいしょ</sup>行在所であった<sup>ぶつこくじ</sup>仏谷寺に向かう。本堂には鍵がかかっていた…。すると、ご近所の女性が「あ、鍵を開けますよう」。

二人で600円を納めて拝観。国の重要文化財で山陰最古の薬師如来、月光、日光菩薩など5体の仏像があった。一木造りの立像は、2mを超える堂々たるもの。航海安全の守本尊として今でも港町美保関を守っている。

しっとりとした街並みが残る青石畳通りを散策し、地元の婦人会のグループが開いているお店に立ち寄る。これから向かう美保関灯台での昼食用に、いなりとちらし寿司、野菜の煮しめを購入。懐かしい蒸しパン（50円！）とお茶で一服。

さあ灯台へ！と、坂道を上っていく。立派な道路だが、車はあまり来ない。良い散歩道だ。眼下に日本海、遠くに大山。景色を楽しんでいると、30分ばかりで灯台だ。

フランス人技師により設計され1898年に初点灯されたこの灯台は、1998年に世界灯台100選に選ばれ、2007年には、灯台としては初めて国の登録有形文化財となった今も、現役で航海の安全を守っている。

早速、弁当を広げる。目の前には日本海が広がる。遙か遠くに隠岐の島影が見える。右が島後、左が島前だろう。

天気が良くても、その他の気象条件がそろわなければ隠岐の島が見えることはないとのこと。この日のバスを選んだ好運に感謝。

美保関には美保神社や関の五本松など他に良い所がいっぱいあるが夕刻、用事があり、早目に帰路につく。町民バスから一畑バスにスムーズに乗り継いで、松江には午後2時半頃到着。5時間足らずのride and walkであったが、気分爽快、得した気になった。



青石畳通り



美保関灯台

(島根県のホームページ<http://www.pref.shimane.lg.jp>から「ようこそ知事室」の「私の島根『見聞き書き』」にお進み下さい。)



#### 4. 山あいの古城の町 — 月山山麓<sup>がっさん</sup>

先日、会合があって月山山麓にある富田山荘を訪ねた。

ここは、清流富田川沿いの小高い丘の上であって、城下町広瀬町を一望できる。遠くは中海まで望むことができ、山手を見上げると月山富田城趾が目の前に迫っていて、なかなかの絶景だ。また、温泉もあって、露天風呂からの眺めがまた格別だと聞いた。

私が会合に参加している間に、同行した妻は城安寺を訪れた。

山門は出雲広瀬藩の第九代藩主松平直諒公により寄進されたもの。

寺は廃仏毀釈の難で全焼したが、山門は無事で、往時の姿がそのまま残っている。本尊脇侍の多聞天立像と広目天立像はともに鎌倉時代の作で、国の重要文化財に指定されている。富田城下町絵図や尼子十勇士絵巻も有名だ。

会が終わって妻と合流し、近くにある月山観光ふどう園でふどう狩りを体験した。私たちが行ったときは、ちょうど巨峰と安芸クイーンが収穫時期を迎えていた。

巨峰はその大きさから「ふどうの王様」と言われているが、甘い芳香とその味も素晴らしい。ここでは、季節に応じて、マスカット、ピオーネ、デラウェアなど、さまざまな品種のふどう狩りができる。今年のシーズンは10月4日で終わってしまったが、来シーズンには、皆さんもぜひどうぞ。

ブドウ狩りの後、再び富田山荘に戻り昼食に猪鍋をいただいた。

野趣あふれる料理というイメージの猪鍋だが、実際には、とても美味しい。猪は地元の猟友会から仕入れたもので、特産品化を検討中だそうだ。地元の食材をふんだんに使った、季節感あふれるメニューに仕上がることを期待しています。

昼食後、島根県登録観光ガイド「ふるさと案内人」の足立さんと依田さんに広瀬の町中を案内していただいた。

まずは巖倉寺いわくらじに向かう。

巖倉寺は、726年に建立された古刹で、本尊の見事な聖観世音菩薩は、国の重要文化財に指定されている。

1187年に現在の場所、富田城内の見上げるほど大規模な石垣の上に移転・建立され、城内の祈願所とされたそう。当時、尼子氏など歴代の城主たちに巖倉寺がいかに尊崇されていたのか、よくわかる立派なお寺だ。

巖倉寺には、松江藩開府の祖である堀尾吉晴公のお墓がある。高さ6メートルほどもある五輪塔の壮大で見事なお墓だ。

吉晴公は、豊臣の3中老の一人で、後には徳川家康の厚い信任を得て、1600年に、尼子氏、毛利氏に続いて富田城主となったが、1611年に居城を松江に移した。そのとき、「自分は松江に行くが亡骸はこの富田の地に埋葬して欲しい」と言い残したという。名城・富田城に対する愛着があったのだろう。

地元の方は、「世が世なら広瀬が島根県の中心になっていたかもしれませんね。」と語っておられた。

巖倉寺には、吉晴公に縁（ゆかり）のものがもう一つある。

本尊を安置している大きな厨子（ずし：仏像などを中に安置する箱のようなもので、正面に観音開きの扉が付く）だ。

ご住職の荒木さんにうかがったところ、この厨子は、吉晴公の奥方が寄進されたものだそう。吉晴公の時代からは実に四百年以上も経つが、大きな扉に残っている、多分、岩絵の具による彩色は驚くほど鮮やかである。よくぞ残っているという感じだ。

巖倉寺から少し上り「太鼓壇たいこのだん」に到着。

この名は、尼子時代にここに鼓楼が設けられ、太鼓で城下に時を報じ、戦の時は兵の士気を鼓舞していたことから名付けられたそう。

鼓楼のあった場所の下方には「千畳平」と呼ばれる広場がある。  
ここにある椎の大木には、戦国時代、毛利方が尼子方に放った矢の鏃（やじり）の跡が残っていたそうだ。そうした激戦の地も、今では桜の名所「太鼓壇公園」として地域の方の憩いの場となっている。

太鼓壇を後にし、富田川を挟んで富田城趾の反対側にある富田八幡宮へ向かう。  
富田八幡宮は、もとは月山山頂にあったものを、富田城築城にあたって現在の八幡山に移したと言われている。

社は小高い山の上であり、長い石段を登ると、本殿まで200mほどの真っ直ぐな長い、苔むした石畳が続いている。両脇は杉やけやきの大木がそびえ、鬱蒼とした中に凜と張り詰めた森厳な雰囲気があって、古い歴史を肌で感じる。

この参道を抜けると、「こんな奥まったところに、こんなにも…！」と驚くほど立派な本殿が現れる。

宮司の竹矢さんの話によると、代々の松江藩主もここによく来て参拝しておられたとのこと。

戦国時代の出雲の歴史を知りうる史跡が、広瀬にこれほど多く残っているとは不明にも知らなかった。

今度来的时候は、見た後、ゆっくり温泉にでも浸かって、富田川のせせらぎに耳を傾けながら、つわものどもが世界に思いを馳せるのもいいだろうと思った。



富田城趾

(島根県のホームページ<http://www.pref.shimane.lg.jp>から  
「ようこそ知事室」の「私の島根『見聞き書き』」にお進み下さい。)

## 5. 松江 — 北堀町の鑿<sup>どう</sup>

松江に住むようになって初めての年の秋、夜の会合が終わり、いい気分の家までの道をぶらぶら歩いているとき、顔見知りのIさんに声をかけられた。「こっちへきて鑿を打ってみませんか」。これが、私と鑿との最初の出会いだった。Iさんは松江の鑿行列を保存する会の会長で、ちょうど、町内の人たちと練習をしているところだったのだ。

このご縁で時々、練習や十月の鑿行列の前夜祭などに勝手参加をし、その後の飲み会などにも入れてもらったりして、準会員のような扱いをしていただいている。

私は生来、音痴で音楽は聴くのは好きだが、歌ったり、楽器は全くダメ。鑿は何度も打っているが、いつもみんなのリズムから外れてしまう。私が、耳に頼らず、他の人の手の動きを目で見て合わせようとしているからだろう、そんな私のために親切な北堀町の人たちは、横に並んだり正面に立ったりして、大きな身振りで手本を見せて下さる。

しかしそれでも、必死で合わせようと気合いを入れ、体を動かして大きな音を出すのは気持ちがいい。普段使わない筋肉や神経に刺激を与えるからだろう。また、大きな鑿から発せられる重い音の響きには、人の拍動のリズムに合わせるかのような何ともいえない調子があって、それが心を落ち着かせてくれるのだろう。

打っているときも楽しいが、練習の後もまたいい。練習が終わると、近所のメンバーの家に子供も大人も皆、集まって、互いに持ち寄った料理などを囲んで、お茶やお酒を飲んだりして、この子は誰それさんの子供だとか、この料理はこの人が名人だなどと歓談をする。親子三代で鑿行列に参加している家もある。町外や市外から参加されている人もいる。

鑿のような伝統文化は、一定の人の集団の中で、個々の人の手や体の中に共通の動作などの形で蓄積され、高齢者が退かれても新しい人が入ってきて、集団が一定の規模で維持されることによって継承されていくということがよくわかる。そのためには、若い新入者が楽しく参加できなければならない。北堀町の鑿では、顔見知りや仲のよい地域の人達は、楽しさを作り出す仕方もよく受け継いでおられるようだ。

私は島根の良さについて語るとき、「豊かな自然や伝統、文化」に加えて、いつも「温かい地域社会と人間関係がここ（島根）にはある」と話している。これは、

島根県内各地を回ってみて感じたことなのだが、そうした地域社会が、松江ほどの都市の中心部にも残っているということは大きな驚きだ。

北堀町の鑿に参加して、伝統文化の継承の実際を目の当たりにしたような気がする。

※ 鑿とは、四尺（1.2m）から六尺（1.8m）ほどもある大きな太鼓のことで、毎年秋に、鑿を2～3台据えた屋根付き山車を子供達数十人が綱で引き、何台も連ねて打ち鳴らしながら市内を行列する「鑿行列」という祭りが行われます。江戸中期頃、松江藩主に京都伏見宮家から姫君が降家されたのを、町民が鑿を打ち鳴らして祝ったことが始まりと言われています。



鑿 行 列

松江文化情報誌 「湖都松江 vol.18」に寄稿

## 6. あなたも島根で暮らしてみませんか？

島根県知事の溝口善兵衛です。

私が最近、世の中の変化として感じることは、  
大都市に住む若者たちの中に、  
田舎で農業をやりたい、山で働きたい、漁船に乗って仕事をしたい、  
といった人たちが増えているということです。

島根県は、工業化・都市化がやや遅れたため、  
かえって、緑濃い森林、清らかな河川、湖沼、海、などが多く残っています。  
こうした豊かで美しい自然の中で暮らしたいという若者たちが、  
Uターン、Iターンなどの形で少しずつ島根に来てくれるようになっています。

こうした若者たちと話をすると、  
島根に来る前は「農業の技術はどこで教えてくれるのか」、  
「住む家はあるのか」など、不安がいっぱいだったと言います。  
そして今は、「自然に近いところで働けるのが楽しい」、  
「子育てもしやすい」と喜んで話してくれます。

そこで、私は、島根県庁の農林水産部の若手職員に、  
そうした若者たちのためのガイドになるような本を  
つくってはどうかと提案しました。

5人の県職員は半年かけて、  
島根に定住した若者たちに会って話を聞き、  
自ら写真を撮り、原稿を書き、編集まで手がけて、  
地域に溶け込んで生きる若者たちの姿を、  
すばらしい本にまとめてくれました。  
それがこの「田舎ごち」です。  
どうか、この機会に是非ご一読下さい。

そうだ、あなたも島根で暮らしてみませんか？



島根県の若手職員が作成した、島根へのUターンのためのガイドブック  
「田舎ごち」(2009年3月31日発行 著者 鄙びと 定価1,500円)に寄せて

## 7. 地方から日本を考える

この4月郷里島根県の知事となり、実感することは若者の大都市集中と高齢者の地方偏在だ。島根の山間地域に挨拶などに行くと、大きな家の奥からゆるゆる出てこられるのはご高齢の方ばかりだ。他方、たまに東京に行って電車などに乗ると、若者だらけだ。

今、日本では出生率の低下で人口の減少と活力の減退が心配されている。しかし日本全体押しなべて出生率が低いのではなく、若者の多い大都市で特に低くなっているのだ。2005年の特殊合計出生率は東京の1.0に対し島根は1.5だが、全国平均は1.27と低くなっている。

日本の戦後の経済発展、さらにさかのぼれば明治以来の近代化・工業化が大都市中心に進んだため、若者たちは働き場の増える大都市に集まり、若者が出ていく島根など地方では高齢者の割合が高くなった。大都市の発展は、大都市での道路、住宅、下水道など生活・産業インフラの充実強化、高等教育機関などの整備を必要とし、そして整備が進むとさらに若者が地方から集まるという経路を辿った。若者の大都市集中と高齢者の地方偏在は表裏一体の関係にある。

大都市は便利で刺激的でさまざまなチャンスがあり若者を惹きつける。しかし大都市の生活は若者にとって決して楽なものではない。国際競争激化などにより雇用条件は厳しくなっている。正社員になっても会社内の競争は厳しい。通勤は満員電車で時間もかかる。残業で夜も遅い。住むアパートは狭く家賃も高い。共稼ぎでも生活は大変だ。自分の生活だけで精一杯だ。結婚して子供を生んでも手助けしてくれる母親などは近くにはいない。こうして大都市では若者が子供を生み育てることは段々容易でなくなってきている。

地方では職住近接で住居費も安く、自然が豊かで生活と仕事のリズムが安定しており、子育ては都市よりしやすく、出生"率"は低くないが、子を生む若者の数そのものが少ないので出生"数"が少ない。

これまでの大都市中心の経済発展は後発国日本にとっては必要なものであったが、大都市が自らの人口の再生ができなくなった今、この発展の仕方は限界に達したと考えるべきではないか。地方にもう少し資金を回し、遅れた地方の社会インフラなどを整備し、地方の発展を少し後押しし、若者の地方回帰を図るべき時代に到達したのではないか。

## 8. 不昧公の時代と現代

### —『松江藩の財政危機を救え』を読む

「松江藩は不昧公の時代に、倒産状態の財政を立て直した」ことは知っていたが、二百年以上も昔のことで資料も十分残っていないだろうし、封建時代のことで現代にはあまり参考にならないだろうと思っていた。ところが、最近、松江在住の史家・乾隆明氏から自著の『松江藩の財政危機を救え』（2008年2月1日松江市教育委員会発行）という60ページ余の本をお送りいただき、読んでみてびっくりした。

第一に藩の重役の覚え書、会計簿、さらには藩外からの訪問者の見聞録などの資料により不昧公の行った改革や政策が相当程度判るということである。乾氏は過去の研究成果なども丹念に分析・整理をされて判りやすくまとめられておられる。

第二に、財政の健全化のためには支出を切り詰め、収入を増やすのが常道であるが、封建制度の下で強引に藩士の家禄削減などを行い、新田開発や農民の年貢の引上げなどを行ったのだろう程度に思っていた。しかし著者は、財政再建の中心は藩内での産業振興により特産品を作り、これを諸国に販売して「外貨」を稼いだことにあり、当時の「優れた経済感覚は、現代の我々と比較しても先進的」だとされている。

七代藩主治郷（不昧公）が明和四年（1767年）十七歳で藩政を引き継いだとき50万両（1500億円相当）の借金があった。藩の年貢等収入は約10万両（300億円相当）で借金残高は年間収入の5倍にもものぼった。この借金を三人の殿様で74年かかって返済したが、治郷の治世39年がその基礎を築いた。その返済記録の記念とも言うべき会計簿『出入捷覧』<sup>ていりしゅうらん</sup>が残されていて、先人がこれを分析・解読しているのを著者はさらに判りやすくグラフなどにして示している。

著者はさらに『御金蔵御有金』<sup>ごきんぞうおんありがね</sup>という藩の積立金会計とも考えられる資金の出入りも調べて、借金返済の財源の多くが年貢収入の増加以外の収入、つまり「石高制によらざる収入」から来ていると分析されている。年貢米収入も借金返済期間中ある程度は増えているが、江戸時代中期以降は貨幣経済が伸展して、石高に入らない産業の発展が大きな役割を演ずるようになったことに対応している。

つまり、お米の生産を基礎にしつつ、隠岐や島根半島ではアワビやナマコなど中華料理の食材を「俵物」として長崎に送って清国に売り、宍道湖周辺の丘陵地や川土手にはハゼを植えてロウソクを作って大阪へ積み出し、中山間地では薬用人参を



栽培し、藩の「人参方」で漢方薬として長崎で清国商人に売り、タタラ製鉄は全国有数の鋼を作り、平田の木綿は松江藩最大の「国益」産業に育った。百種類にのぼる「他国から金銭をかせぐ国益産業」を番付表にした『雲陽国益鑑』<sup>うんようこくえきかがみ</sup>を見ると、現代以上に「外貨」を稼ぐ産業が活発だったようだ。文化人の殿様治郷は家臣に「貨殖理財につとめよ」と言って産業振興に力を入れた。この時期、松江藩の人口は産業の発展とともに増加し、薩摩、加賀などの雄藩を凌いでいたらしい。

著者は最後に「夢のような繁栄を誇った幕末の出雲国が、近現代になるとなぜ経済的な後進地域になったのか」と自問し、一言で言えば、「産業構造の変化についていけなかった」からだと自答している。例えば平田の木綿はインドやアメリカからの輸入品に押され、タタラ製鉄は釜石・八幡の官営の近代製鉄所に圧倒され、薬用人参は西洋医学に追われ、ロウソクはガス燈や電燈にとって代わられた。

今の島根を見ると戦後の工業化にも遅れて、最近は人口も減っているが、発展が遅れたためにかえって豊かな自然、古き良き文化・歴史、温かい人間関係といったものが世の中の変化の中で大きな強みになってきているように思う。私はこの強みを生かしながら産業発展を財政健全化と両立した経済の活性化を図っていく必要があると考えている。本書は私に強い刺激を与えてくれた。



松江城の四季

山陰中央新報に寄稿（平成20年3月7日掲載）